

2006年11月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

北半球500 hPa 高度では、上旬にベーリング海付近で発達したプロッキング高気圧と、その西（沿海州付近）および東（アラスカ湾～カナダ西部）にトラフが明瞭に見られた。カナダ東部から北大西洋北西部にかけてと、西～中央シベリア、ヨーロッパ南部で正偏差、アイスランド付近で負偏差が見られた。

熱帯の対流活動は、インド洋東部から海洋大陸とフィリピン付近の広範囲で不活発で、特にジャワ島からカリマンタン島にかけて顕著だった。一方インド洋西部では非常に活発で、インド洋の海面水温偏差とも整合的であった。太平洋では西部のメラネシア、北太平洋の熱帯収束帯域（ITCZ）で活発だった。オーストラリア北東部から東方海上では、外向き長波放射量（OLR）が正偏差となった。

850 hPa 流線関数および風ベクトルでは、インド洋東部から海洋大陸にかけての対流不活発域に対応して、同域で赤道対称に高気圧性循環偏差が見られ、インド洋で強い東風偏差が見られた。一方、東部太平洋では低気圧性循環偏差が見られた。

SOI（南方振動指数）は+0.1と、6か月連続のマインスから僅かに正に転じた。

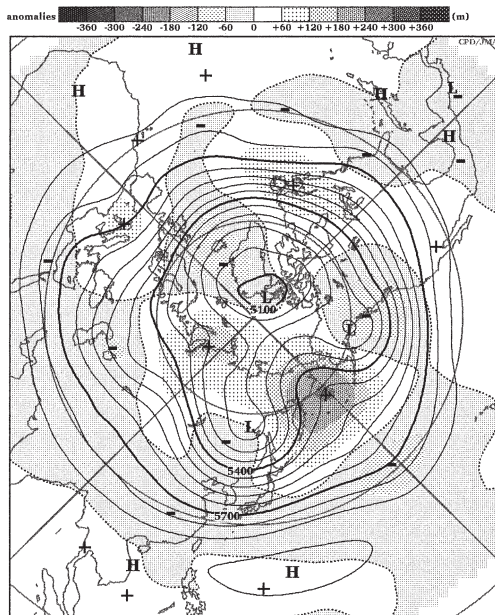
世界の天候

- ① 東シベリアの高温・多雨
- ② 西シベリアの多雨
- ③ 中国から東南アジアの高温
- ④ フィリピン南部からジャワ島の少雨
- ⑤ ヨーロッパ北部の多雨
- ⑥ ヨーロッパ中部からアフリカ北西部の高温
- ⑦ マダガスカル周辺の高温
- ⑧ 北米東部の高温
- ⑨ カナダ北西部からアラスカ東部の低温・少雨
- ⑩ オーストラリア東部の少雨

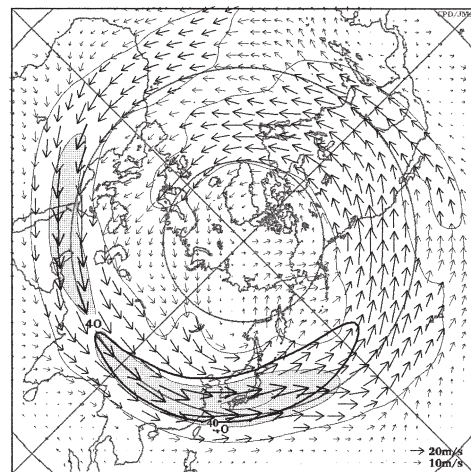
一方、フィリピン北部を中心とした地域では、台風の上陸が相次いだ。月末には台風第21号「ドリアン」が上陸し、400人以上が死亡、約600人が行方不明になっていると報じられた。

オーストラリアでは、森林火災の発生や深刻な干ばつによる被害が報じられた。同国気象局によると、サウスオーストラリア州では、8～11月の4か月降水量が、1900年の観測開始以来の最少記録となったことが明らかになった。

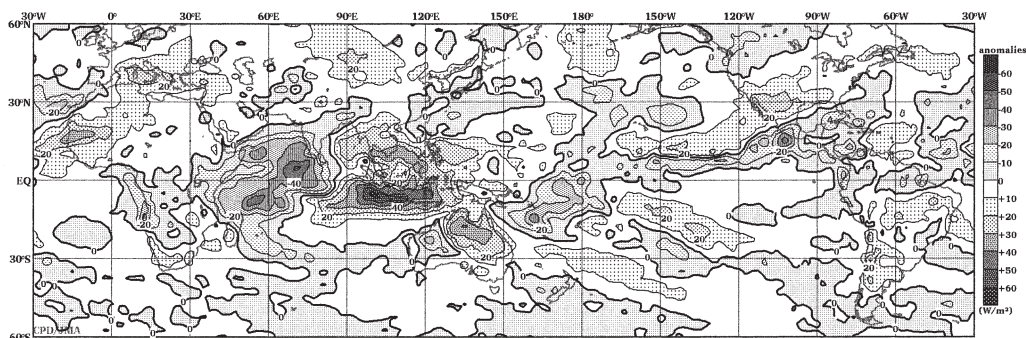
- ⑪ オーストラリア南部の高温
- （気象庁地球環境・海洋部気候情報課 福山幸生）



2006年11月の北半球月平均 500 hPa 高度および平年偏差
等値線間隔は 60 m, 偏差パターン間隔は 30 m. 平年値は1979～1993年の ECMWF15年再解析データによる。

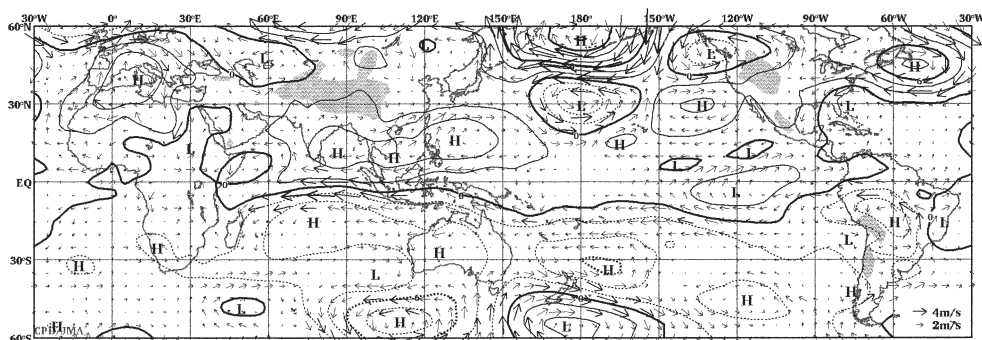


2006年11月の北半球月平均 200 hPa 風速および風ベクトル
等値線間隔は 15 m/s. 陰影部は 30 m/s 以上. 太実線で囲まれた領域は平年の 30 m/s 以上の領域を示す. 平年値は1979～1993年の ECMWF15年再解析データによる。



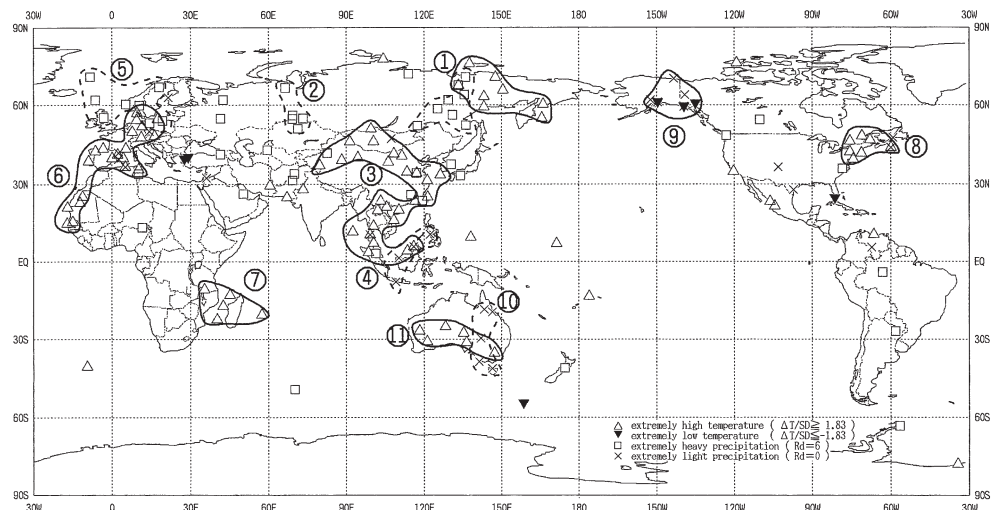
2006年11月の月平均外向き長波放射量年平均偏差

等値線間隔は 10 W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データは CPC/NCEP/NOAA、平年値は1979～2000年のデータから作成。



2006年11月の月平均 850 hPa 流線関数年平均偏差及び風年平均偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 、平年値は1979～1993年の ECMWF 15年再解析データによる。



2006年11月の世界の異常天候分布図

△異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨

異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上、異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。図中の番号は本文中の番号と対応している。